

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 PINUNSOTTIKUL Poranee

論文題目 タイ語を母語とする日本語学習者の
不同意表明に関する語用論的研究

論文審査担当者

主 査	名古屋大学准教授	奥田 智樹
委 員	名古屋大学教授	堀江 薫
委 員	名古屋大学教授	福田 真人
委 員	名古屋大学名誉教授	井上 公

本研究はタイ語を母語とする日本語学習者に見られる不同意表明を研究対象とし、日本語母語話者およびタイ語母語話者による不同意表明と比較することによって、その語用論的特徴を明らかにしようとしたものである。不同意表明は、学習者にとっては、うまく行わないと目標言語の母語話者に誤解を招きかねず、語用論的な面での難しさを感じることの多い言語行動であることから、その語用論的特徴を、不同意表明の切り出しと終結部に現れた言語表現とそれに関わる状況的な要因との関係から捉えようとしている。

以下、本論文の概要と評価を述べる。

[本論文の概要]

本論文は7章からなる。

「第1章 序論」では、まず本研究の研究背景を述べた後で、隣接する概念や用語との関連を踏まえて、研究対象としての不同意表明を「話し相手が示した見解に対するそれと異なるものの表明」と定義している。また、タイ語を母語とする日本語学習者の習得に影響を与える要因として、母語の影響、熟達度の違い、学習環境の違いを検討項目とすることに言及した上で、以下の章における分析のための4つの具体的な研究課題を提示している。

「第2章 研究の理論的な枠組みと先行研究」では、まず本研究の理論的背景となる発話行為理論、異文化間語用論、中間言語語用論を概観し、中間言語語用論において重要な論点となっている語用論的転移、過剰一般化、語用言語学と社会言語学との関係について概説している。さらに、先行研究を、様々な観点から不同意表明の特質を解明した研究と第二言語学習者の語用論的能力の発達に関する研究に分けて概観した後、それぞれの問題点を取り上げ、それを踏まえて本研究の位置付けを示している。

「第3章 研究方法」では、本研究における調査の概要やデータの収集・分析方法について詳述している。まず中間言語語用論の先行研究で用いられてきたデータ収集方法を紹介した後、本研究では談話完成テスト(DCT)を採用し、補足的な情報を得るためにフォローアップ・インタビューを使用することを述べ、分析対象となる調査対象者のグループ分けやDCTの内容について記述している。本研究では調査対象者を、日本語母語話者(JJ)、日本で日本語を学んでいる上級レベルの学習者(JSL)、タイで日本語を学んでいるタイ語を母語とする上級レベルの学習者(JFL 上位群)、タイで日本語を学んでいるタイ語を母語とする中級レベルの学習者(JFL 下位群)、タイ語母語話者(TT)の5つのグループに分け、日本語学習者の日本語能力レベルの判定方法として SPOT のバージョン A と小川(1993)のクローズ・テストを用いている。また、DCTの内容は相手となんらかの事柄について一緒に考えて結論を下すようなものに統一し、相手との上下関係、親疎関係、負荷度の大きさという3つの指標に基づく8場面を設定している。本章の後半では、本研究における意味公式の分類を提示し、不同意表明の切り出しと終結部に焦点を当てることの根拠とそのコーディングの仕方、および本研究の分析手法である決定木分析について述べている。本研究では意味公式を15種類に分類し、さらにそれらを(A)不同意への付加詞、(B)不同意の主要部、(C)代替的見解の3つのグループにまとめている。

「第4章 不同意表明における言語使用の日タイ比較」では、研究課題(1)「日本語母語話者とタイ語母語話者の不同意表明にみられる類似点・相違点を明らかにする」に基づいた JJ と TT の比較を中心とした分析が述べられている。これらのグループの切り出しには12種類の意味公式が見られ、JJ

にも TT にも「否定理由」が最も多く現れた。しかしその次に続くものはこの両者の間で異なっており、JJ では「相手の発話の受け入れ」であったのに対して、TT では「代替案」であった。また、決定木分析の結果において JJ はより配慮の度合いの高い「相手の発話の受け入れ」を有意に多く使用しており、また JJ は「否定理由」を有意に多く使用しているのに対して TT は「不同意の結論」を有意に多く使用していることから、JJ は TT より対人関係配慮の傾向が高いことが伺えた。

一方、終結部には 10 種類の意味公式が見られ、JJ に最も多く現れたのは「代替案」であり、それに対して TT では「否定理由」であった。このそれぞれに関する決定木分析の結果から、JJ でも TT でも相手との上下関係と親疎関係が、終結部における各意味公式の出現と非出現に有意な影響を与えていることが分かった。また、「でも」のような逆接を表す接続形式やヘッジなどの言語表現の使用において、JJ と TT の間に様々な類似点や相違点が観察された。

「第 5 章 日本語熟達度と語用論的能力の関係」では、研究課題(2)「日本語学習者の不同意表明には日本語母語話者およびタイ語母語話者とのような類似点・相違点があるかを明らかにする」、および研究課題(3)「日本語の熟達度は学習者の不同意表明にどのような影響を与えるかを明らかにする」に基づいた JJ、JFL 上位群、JFL 下位群、TT の比較を中心とした分析が述べられている。研究課題(2)に関しては、意味公式の種類の数において、JFL 上位群と JFL 下位群は JJ と TT の中間に位置していることから、学習者には語用論的転移が生じていることが示唆された。しかし、JFL が JJ や TT とは異なって「相手の発話の受け入れ」を多用しているという現象も観察され、それについては、教室環境で習得が行われているという外在的要因の影響と、言語間距離の認識という内在的要因の影響とが考えられるとしている。

また、研究課題(3)に関しては、切り出しに現れた「相手の発話の受け入れ」に関する文脈的変数の影響や、終結部に多く現れた「代替案」と「否定理由」の出現率において、JFL 上位群は JFL 下位群より JJ に近い傾向が見られ、熟達度が高くなると目標言語の語用論的知識が習得しやすくなり目標言語に近くなるという結果が得られた。しかし、それ以外の意味公式別の文脈的変数による影響の結果については JFL 上位群と JFL 下位群との間にあまり差が出なかったことから、本研究は熟達度の違いより学習者における言語間距離の認識の方が学習者の語用論的転移に強い影響を与えていることを報告するものともなった。学習者が実際に使った表現を観察すると、JFL 下位群には一人の調査対象者が全ての状況に対して同じ意味公式を使用するといった表現の単純化の問題などが見られた。

「第 6 章 学習環境と語用論的能力の関係」では、研究課題(4)「日本語を第二言語として学習するか、外国語として学習するかによって学習者の不同意表明に異なる影響が見られるかを検討し、違いが出る場合にはその違いを明らかにする」に基づいた JJ、JSL、JFL の比較を中心とした分析が述べられている。決定木分析の結果、「代替案 親疎関係(疎)同等」「否定理由 親疎関係(親)」「不同意の結論 意見要求」において JSL は JFL より JJ に近い傾向を示しており、一方 JFL が JSL より JJ に近い傾向を示したものはなかったことから、JSL が JFL よりも JJ に近い傾向を示していると判断された。このことは第二言語環境の優位性を実証するものと言える。しかし切り出しと終結部に現れた意味公式の出現頻度の全体的な傾向については、JSL と JFL の間に顕著な違いが見られなかった。その理由としては、語用論的能力の習得に対する断り、依頼などの発話行為の種類の影響と、目標言語の語用論的特徴に対する学習者の認識が強いことによる影響が働いている可能性が考えられるとしている。また、実際に使われた言語表現においては、JSL には親しい友人同士の場面で母語話

者に近い表現の仕方がしばしば見られたのに対して、JFL には見られなかった。このことは、親しい友人同士の表現の習得においては、目標言語母語話者と接する機会が豊富な JSL 環境の方が有利であることを確認するものとなっている。

「第7章 結論」では、本研究で得られた結果をまとめた上で結論を導いている。主な結論として、タイ語と日本語の実際の言語間距離、学習者の日本語熟達度の違い、日本語学習環境の違いといった非認知的な要因よりも、両言語間の語用論的違いに対する認識といった認知的な要因が学習者の言語使用に大きな影響を与えていることを掲げている。そして最後に、日本語教育への示唆、本研究の限界および今後の課題について述べている。

[本論文の評価]

本論文において最も評価されたのは、タイ語を母語とする日本語学習者の不同意表明という申請者独自の着眼点に基づくテーマを、構成のしっかりした手堅い研究としてまとめ上げた点である。テーマ設定が明確である上に、先行研究の渉猟も非常に詳細に行っており、論旨も明快で、結論も分かりやすくまとめられている点が優れていると判断された。また、データ分析においては決定木分析という比較的新しい手法を取り入れ、その結果得られた非常に枝分かれの多い込み入った樹形図を丹念に解析し、注目に値する現象を数多く抽出している点も評価された。研究内容はタイ語以外の外国語を母国語とする人たちの日本語教育にも十分に資するものであり、その点も本論文の学術的価値を高めているとされた。

ただし、口述試験においてはデータ収集方法や分析に関する問題点もいくつか指摘された。例えば、不同意の研究に対する同意の研究の位置づけや、ジェスチャーや表情などでためらいが表明された場合などの扱いに疑問が残る点、分析方法について、不同意表明の終結部は切り出しが影響を与えるファクターとして考慮せざるを得ないにも関わらず、本研究ではこの両者を別々に取り出して分析している点、中間言語語用論の分野における進展が取り入れられているように見えず、このテーマを扱うことに今日的意義が感じられない点などである。また、研究の価値をより高めるための注意点として、例えば、実社会において部下が上司に発言する場合のような、将来に深刻な影響を与えかねない状況を場面として設定した方が、問題がより鮮明になり興味のあるデータが得られること、DCTの結果に伴うある種の不自然さをカバーするためにリアリティチェックという意味で話し言葉のコーパスとの比較も行うべきこと、といった提案がなされた。上記の問題点はいずれも本論文の本質的な価値を損なうものではなく、申請者の今後の研究における改善に期待することとされた。本論文がタイ語を母語とする日本語学習者の言語使用を扱ったきわめて堅実な研究として、第二言語学習者の習得過程の実態の解明や、日本語教育現場への応用に十分貢献し得るものであることは、審査委員全員が一致して認めるところであった。

以上の評価から、審査委員は全員一致して、本論文が博士学位論文として十分にその水準に達していると判断した。